たという。
石なれど製塩事業で莫大な収入を得てい
た赤穂藩を、幕府領若しくは柳沢吉保領
政を潤すことを計画した。藩主内匠頭長矩
(痞)持ちであるので、赤穂藩の国替えの
内匠頭長矩は必ず騒動を起こすであろう。
赤穂藩を断絶させ領地は召し上げて幕府領
の上、浅野本家の安芸・備中四二万石を
の責によって削封を行い、それも幕府領
出来ると考え、上野介義央に赤穂藩の「国
内匠頭長矩に伝えさせたのではないだろう
放映中の「元禄撩乱」では、将軍綱吉と
穂藩は勿論の事、吉良家ひいては上杉藩を
狙って仕掛けた出来事である。)
内匠頭長矩はこともあろうに勅使接待の殿
件(刃傷事件)を起こしてしまった。
内匠頭長矩を取調べれば、理不尽な「国替
るのを恐れた綱吉と吉保は、ろくな取調べ
腹を言い渡した。

易に出
己の手
出せと
おもね
現実で
禄太平
その『武
部分的に
亡した現
する『武
一年所持
本・下巻
史談』創
上巻は次

武家不
浅野長
死生有
随不同

陽光とさは有難げをなし・食肴のしは誠なとてなく、由。まるべし。

旧型塩田時間の長ゆでの技白な結晶石を召し甲された。又はじめ

を携えて別府村庄屋堀助之治療を乞うた。（万福寺と一六九八）堀助之丞吉治が海禅師を開山に招いて、堀を開いた関係）

痛は二春秋で完治したが、囲の人々から師表と仰がれ、父遊が深かったので、流川兵衛邸に留まっていた。四日如何なる理由によるか切り心臓にとどめをあてた。

治・業海禅師宛の書状と山鹿素行・素水親子と大短冊と大小刀が残されている。水家伝）。昭和四十年当時、品は、素水の書（浜脇K家刀（元町H家所蔵）のみで

説では、都の錦は薩摩になっている。一方堀助は別府で自刃している。堀家の記録では二八歳の「元禄太平記」一巻に、くばくもあらずして、浪の泡と消ゆる事、である。

は一四年（一七〇一）十月、宝永二年には都の錦は筆禍事件で薩摩の金山に捕られ薩摩の金山の労役に薩摩の金山に流罪の刑には、御公儀より「松の木もこれを狂言にしてはいたのに、彼は禁令を破った我物語」（またの名を

風程らい結えは
照星にかるが御許